

荒井良雄・川口太郎・井上孝編

『日本の人口移動－ライフコースと地域性－』

古今書院, 2002年6月, 195pp.

「日本の人口移動」を冠する本書は、日本の国内人口移動に関する、総勢9人の研究者の手による論文集である。そこに収められた論文は、幅広い読者を想定して、いずれも読み易さを重視した文体になっている。このため、入門者であっても、気軽に、しかも興味を持った箇所から読み進めることができるであろう。しかし、その内容に少しでも立ち入るならば、通常の研究書に劣らぬ研究水準と魅力的な議論の展開に気づくことになる。

本書は、以下に示すように、全10章から構成されている。第1章 戦後日本の人口移動(江崎雄治)、第2章 Uターン移動と地域人口の変化(江崎雄治)、第3章 地方の時代と若年層の地元定着(山口泰史)、第4章 人口学的視点からみたわが国の人口移動転換(井上孝)、第5章 大都市圏郊外の形成と住民のライフコース(谷謙二)、第6章 大都市圏における世帯の住居移動(川口太郎)、第7章 地方都市住民の居住経歴(溝口貴士)、第8章 転勤移動と単身赴任(荒井良雄)、第9章 研究開発技術者のライフコース(中澤高志)、第10章 高齢期の移動(田原裕子)。各章で用いられた研究資料をみると、第1章と第4章は国勢調査や住民基本台帳人口移動報告、第2章、第4章～第7章、第9章は独自の質問紙調査、第3章と第8章が旧厚生省人口問題研究所(現国立社会保障・人口問題研究所)の実施した第3回人口移動調査、第10章がエイジング総合研究所の実施した調査の資料および文献、となっている。

本書の特徴は、様々な国内人口移動現象を対象としている点など、幾つか挙げられよう。その中で、評者は、縦断的なデータを利用して人口移動現象にアプローチしたことに注目したい。従来のわが国の国内人口移動研究は、その依拠する資料がもっぱら国勢調査や住民基本台帳人口移動報告などの横断的なデータであった。このため、分析結果の解釈や分析そのものに限界があったことは周知の通りである。こうしたなか、独自の調査を実施することにより、あるいは既存資料の再検討を行うことにより、縦断的な人口移動データの特徴を活かしながら、これまで未解明だった点に踏み込んでいった意義は大きい。字数の制約で全てを紹介できないのが残念であるが、例えば、第2章では、かつて十分に論じられてこなかったUターン現象に対し、世代別のUターン率をはじめ、Uターンをめぐる意思決定、Uターン現象の地域人口へのインパクトなどを定量的に明らかにしている。第3章では、地方圏出身の若年層の初就職時点での出身地への残留割合を世代別に検討することにより、近年の同割合の上昇を明らかにし、そうした現象の背景として、地方圏と大都市圏との就業機会の格差縮小などの経済的要因があることを指摘した。

なお、第4章では、わが国の人口移動転換に対する人口学的な視点からの解明が試みられており、本書の中では特異な章となっている。しかし、同研究は、従来の人口移動研究の流れからみればむしろ主流に位置づけられるものである。内容的にも、大都市圏・非大都市圏間の純移動数の変化を、4つに要因分解(①地域人口シェア効果、②コーホート規模効果、③平均きょうだい数効果、④景気変動等の効果)して論じており、非常に興味深い。

最後に、評者の気になる点を1つだけ述べたい。それは本書の構成である。共著の場合にしばしばみられることであるが、本書でも、各章の相互の関連性が見出しにくいという難点をもつ。また、各章で得られた知見を、本書全体あるいは既存の人口移動研究との関連で相対化するような試みも欲しかった。これらの点は、本書のタイトルが「日本の人口移動」であり、また幅広い読者を想定した啓蒙書的作用を期待されることからして残念であるが、本書の意義を低下せしめるものではない。今後とも、本書のような、意欲的な人口移動研究が行われることを期待したい。(山内昌和)